

# 令和5年度 千葉県 英語教育改善プラン

## 目標

積極的に英語を使い、コミュニケーションを楽しみ、自分の気持ち等を伝え合うことができる児童の育成。

### 1. 現状

#### 改善が進んだ点

①・・・「話すこと」（発表・やりとり）のパフォーマンステストの実施が進み、実施回数が増加した。

R3 R4

5年 4457回 → 5182回

6年 4783回 → 5565回

②・・・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の公表が進んだ。

R3 R4

公表 7.0% → 17.2%

把握 38.4% → 41.1%

（学校数全体に対する割合）

※①②ともに英語教育実施状況調査結果より

#### 未だ改善が必要な点

①・・・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の設定している学校の割合が減っている。

R3 R4

設定 57.2% → 48.0%

※英語教育実施状況調査結果より

②・・・外国語担当教員が指導力向上研修を必要としている。

※小学校スキルアップ研修参加者のアンケートにおいて80%以上が必要と回答

### 2. 分析

①・・・小中連携推進会議において、パフォーマンステストの実施について研修したことが要因の一つである。

また、小学校英語に関わる研修において説明をしてきたことで教員の意識が向上した。

②・・・①と同じ機会に、「CAN-DOリスト」形式の到達目標を設定した上で、パフォーマンステストに取り組むように研修したことで、児童への到達目標についての説明や達成状況の把握が進んでいる。

①・・・「CAN-DOリスト」を作成したものの活用していないため、担当者がおらず管理されていないことが考えられる。活用している学校との二極化が進んでいる。

②・・・小学校外国語の指導する際に、指導技術について実際に体験して研修する機会が少なく、担当教員が自信を持って指導できていないことが要因の一つである。

### 3. 施策・事業

①・・・小中連携推進会議では、パフォーマンステストの実施について引き続き研修する。また、令和4年度に千葉県が独自で作成した小学校向けのパフォーマンステストの周知を行い、活用してもらうようにすることで、さらにパフォーマンステストの実施を進めていく。

②・・・「CAN-DOリスト」について小中連携推進会議にて管理するように指導し、必要に応じて学校の現状に合わせて修正するように指導助言を行っていく。また、学校訪問の際には、「CAN-DOリスト」による到達目標の公表や児童の英語力の把握について確認する視点を持ち、教育事務所指導主事より指導助言を行うようにする。

①・・・小中連携推進会議にて、「CAN-DOリスト」を管理するように小学校へ指導し、必要に応じて学校の現状に合わせて修正するように指導助言を行っていく。また、学校訪問の際には、「CAN-DOリスト」による到達目標の公表や達成状況の把握について確認する視点を持ち、教育事務所指導主事より指導助言を行うようにする。

②小学校外国語スキルアップ研修を実施  
→本研修では、音声から文字へどのように指導していくのかを学ぶ。絵本を活用した言語活動や児童へ音声の違いを気づかせる方法等を大学教授より体験を通して学ぶことで、指導法を習得し、自信を持って指導できるように研修を行う。

# 令和 5 年度 千葉県 英語教育改善プラン

**目標** 英語を使って、自分の気持ちや考えを即興で伝え合うことができる生徒の育成。

## 1. 現状

改善が進んだ点

①・・・授業における生徒が英語で言語活動をしている時間の占める割合が上昇。

	R3	R4
中1	67.7%	→ 69.2%
中2	63.2%	→ 63.8%
中3	59.5%	→ 64.8%

②・・・中学3年生でCEFR A1相当以上の英語力を有している生徒の割合が上昇。

	R3	R4
中3	52.0%	→ 59.1%

※①②ともに英語教育実施状況調査結果より

未だ改善が必要な点

①・・・授業における生徒が英語で言語活動をしている割合が上昇しているが、千葉県はこの項目の目標値を100%とし、英語の授業は英語で行うことを求めているが、達成できていない。

②・・・中学3年生でCEFR A1相当以上の英語力を有している生徒の割合について、千葉県は60%を目標にしており達成できていない。

## 2. 分析

①・・・研修において、英語の授業は英語で行うことを説明しており、教員の意識が高まっている。

中学校における、発信力を高める授業の好事例を周知することで話すことや書くことも言語活動の量が増加したことが要因の一つである。

②・・・①の要因に加え、教員の英語による発話量の増加により、4技能をバランスよく指導することができてことにより、生徒の英語力が向上したと考えられる。

①・・・目標値を達成できていないが、ICTを活用しきれていないことや「読むこと」や「聞くこと」等の一部の技能の指導に重点的に取り組んでいることが見受けられるため、目標値達成に至っていないと考えられる。

②・・・目標値達成はできていないが、達成目前まで迫っており、今後も4技能をバランスよく指導することで生徒の英語力向上を図る。

## 3. 施策・事業

①外国語教育小・中・高連携モデル事業  
→発信力を高めるための授業について研究し、好事例として発信していく。これまでの動画を教科部会等でも活用できるように周知をしていく。

①パフォーマンステストに係る県独自問題作成  
→パフォーマンステストを活用し、発信力を高めるとともに、生徒が英語で言語活動を行う時間を増加させる。

①②小中連携推進会議  
→小学校と連携を図ることで、既習内容を踏まえた言語活動を実践し、より効果的な言語活動にしていく。

②4技能向上English Workshop  
→教員の英語力向上を図ることで、教員の英語による発話量の増加を通して、生徒の英語による言語活動の充実につなげることで生徒の英語力向上を目指す。

①外国語教育におけるICTの効果的な活用研修  
→ICTやデジタル教科書を活用することで生徒の英語による言語活動が実践できるように研修を行うことにより、授業改善を促進させる。また、情報交換の場を設け、多くの事例を交流することで活用促進を図る。

②生徒の発信力を高めるオンライン英語研修  
→「読むこと」「聞くこと」に偏ることなく4技能をバランスよく指導することで生徒の英語力向上を図る。理論研修だけでなく、授業実践を通し、指導力向上を目指す。

# 令和5年度 千葉県 英語教育改善プラン

## 目標

英語を使って、社会問題等について、相手に分かりやすく説明し、討論することができる生徒の育成。

### 1. 現状

#### 改善が進んだ点

①・・・高校3年生でCEFR A2相当以上の英語力を有している生徒の割合が上昇している。

R3	R4
高3 42.0%	→ 46.5%

②・・・授業において英語で発話する教員の割合が上昇している。

R3	R4
高普通 38.3%	→ 47.6%
高国際 97.5%	→ 100%
高総合 41.6%	→ 50.4%

※①②ともに英語教育実施状況調査結果より

#### 未だ改善が必要な点

①・・・グローバルに活躍することを目指す生徒が多い学校やコースでは、さらにバランスのとれたコミュニケーション能力育成を目的とした取組が必要である。

②・・・ICTの活用をさらに促進させる。言語活動の充実を図るため、ICTを活用し、4技能をバランスよく指導する機会を増やす必要がある。

### 2. 分析

①・・・学校訪問では、英語の授業を英語で行うことを指導するとともに、生徒の言語活動を充実させることを通して英語力向上を目指すように指導助言を行ってきたことが要因の一つである。

②・・・研修や学校訪問時に、教員の英語による発話量を増やす必要があると指導助言を行ってきたことで教員の意欲が少しずつ向上し、実際に発話量が増加したと考えられる。

①・・・生徒が授業以外で英語に触れる機会が少ない。生徒が授業以外でも英語に興味を持ち続けながら、英語力を高めていく取組が必要である。

②・・・ICTをどのように活用したらよいのか分からない教員も多いのに加え、指導法や事例の周知が少ないことが要因の一つである。研修において、活用方法や具体的な指導法について学ぶ機会を作る。

### 3. 施策・事業

①外国語教育小・中・高連携モデル事業  
→発信力を高めるための授業について研究し、好事例として発信していくことで、生徒の英語による言語活動の充実を図っていく。

①パフォーマンステストに係る県独自問題作成  
→パフォーマンステストを活用し、生徒の発信力を高めるとともに、生徒の英語による言語活動を充実させる。

①②4技能向上English Workshop  
→教員の英語力向上を図り、英語による発話量を増やす。また、生徒の英語による言語活動の充実につなげ、最終的に、生徒の英語力向上を目指していく。

②生徒の発信力を高めるオンライン英語研修  
→教員の英語による発話量を増加させ、言語活動の質・量ともに改善を図る。

①AI英会話学習支援システムを活用した「話すこと」の力を高める実証研究  
→英語教育拠点校にAI (IntelLLA) を導入し、自宅でAIと英会話ができるようにすることで、生徒のコミュニケーション能力の向上を図る。また、AIによる英語力判定を活用し、授業改善や生徒の学習意欲の向上につなげていく。

②外国語教育におけるICTの効果的な活用研修  
→ICTの具体的な活用方法と実践例を学ぶことで、教員のICT使用率を向上させる。